

優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

自分にできること

南丹市立園部中学校
二年 岸本 涼

「小笠原諸島に中国船が〇〇隻出没しました。」
耳を疑うようなニュースが、テレビから流れてきました。日本の近海は赤珊瑚の宝庫です。中国ではその珊瑚を自由に採ることができないので、日本に来て密漁しており、しかも、船の数が多すぎて取り締まりきることができないというのです。

「領土」とは、例えていうと家と同じです。だから、他の人が入る時には、その家の人の「許可」が必要です。許可なしに入るとは犯罪です。それなのに、どうして公然と中国船は日本の領海に入っているのか。そして日本の資源を奪っているのか。私は大きな憤りを覚えました。でも、同じようなことがもう七十年近くも行われている場所があります。それが「北方領土」なのです。

北方領土を約七十年に渡って不法に占拠している国、それはロシア（ソ連）です。第二次世界大戦が終了してから北方領土に侵入し、島に住む人々の生活の場を奪ったのです。ソ連の軍人を恐れて小舟で逃げる途中で多くの人が亡くなったり、ソ連によって強制的に島を離れる時には、まるで荷物のようにクレーン車でつり上げられたりと、想像もできないような出来事もあったそうです。でも、本当の辛さはここからでした。「今は苦しくても、しばらくすればきっと島に戻ることもできる。」との希望は、今も果たされていません。このことを知ったとき、私は中国船の密漁の事実以上に憤りを感じました。明らかに不合理なことが、ど

うして公然と行われ、しかもそれがこんなに長い間続いているのだろうか。そして、ロシアとはどんな国で、そこに住んでいるロシア人とはどんな人々なのだろうか。

調べていくうちに、ロシアと日本は案外近い関係にあることがわかりました。日本海を挟んで隣り合わせにある国、という地理的な近さだけでなく、ロシアの人々は日本に対して、とても近い気持ちを持っていて、特に自動車や電化製品には大きな信頼を持っています。北方領土には鉄道などの公共交通機関がないので、日本の中古車が大活躍していると聞いたことがあります。また、日本人のことは「勤勉で伝統や文化を大切にしている人々」と思っているそうです。

こうして考えてみると、ロシアの人々が日本に何を期待しているのかが、見えてくるように思いました。ロシアの人たちは日本人の「勤勉さに基づく技術」を求めているのではないのでしょうか。宇宙にロケットを打ち上げるような国なのに、一方、国民の生活ではまだ公共施設の整備も追いついていない現状が北方領土にはあります。その点から見ても、島の人々の日本に対する期待は大きいと思います。

北方領土が日本に返還されたら、島の生活は今よりももっと快適になるはずですが、そのことを島に住むロシアの人々に伝え、日本人々とロシアの人々が共存することを約束した上で日本に返還してもらおうのです。そのために、まず島に住む人々と交流を進め、日本文化や技術、そして日本人に対する理解を深めてもらうのです。そして、その取組がやがて国を動かす原動力になれば、確実に今の状況から踏み出せると思います。国の大きな動きは一人一人の国民によってつくられます。一人でできることは少なくとも、まとまれば大きな力になります。私は、その原動力の一つになります。

優秀賞（京都市教育委員会教育長賞）

北方領土を考える

京都市立西京高等学校附属中学校

二年 森田 祥空

「北方領土」とは、北海道の北東にある、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島を指す言葉だ。この島々は日本の領土であり、過去にも外国の領土だったことはない。しかし、今は不法な占拠をされてしまっている。第二次世界大戦時、中立条約を結んでいたソビエト連邦がそれを無視し、日本がポツダム宣言を受諾したあとに占領したからだ。そしてそれをロシアが引き継いだのだ。日本人は全員強制的に移住させられ、現在はロシア人が住んでいる。

では、占領されてから約七十年も経っているのに、どうしてこの問題が解決されないのだろうか。私は四つの理由があると思う。

まず一つ目は、占拠することで大きな利益を得られることだ。島を占拠すれば、その周りの海を自国の領海のようにあつかうことができる。その海にある豊かな資源も自国のものにできる。

二つ目は、ロシアの人が多く住んでいることだ。いくら日本の領土だとはいえ、住人を強制的に追い出すわけにはいかない。その人たちのふるさとを奪うことになってしまふ。そうすれば、かつての住民と同じような深い悲しみを味わうことになる人が再び生まれてしまふ。

三つ目は、私たち日本人の関心が薄いことだと思ふ。返還されれば、何人も人のふるさとを取り戻せる。

島の豊かな自然を利用できるようにもなる。要するに、大きな利益があるはずなのだ。それなのに関心が薄いのは、知識を得たり、そこから考えたりする機会が少ないからではないだろうか。

そして四つ目は、主張する努力が足りていなかったからだと思う。主張するということは、第三者に事実を伝えるうえでとても重要なことだ。私たちはテレビや新聞を使うことなどできない。だから、私たちは声が大いなる主張が正しいと考えてしまいがちである。

「主張をすること、関係を悪化させてしまうのではないか」と言う人もいるだろう。しかし、私はそれが正しいとは思わない。なぜなら、重要な問題を棚上げしたままでの関係こそ、危険だと思うからだ。そのような関係は本来の友好関係ではないと思う。

主張をするためには、もっと知識や関心を持たなければならぬ。北方領土問題について知り、理解を深める必要があるのだ。国民みんなできれば状況も改善されていくと思う。

私は、一刻も早く北方領土が日本に返還され、それがあつたら当たり前の幸せを味わえる日が来ることを待ち望んでいる。その日は絶対に来るはずだ。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

関心を持つという火を灯し続ける

京都府立園部高等学校附属中学校
三年 花阪 大輝

小学校の頃から「北方領土」という言葉を知っている。社会科の授業で習ったし、テストにも問題が出ていた。からだ。多くの人も僕と同じだと思う。しかし、それは言葉だけの知識ではないかと思ひ、社会科の授業をきっかけに北方領土問題について深く考えることにした。

北方領土に関する資料を見て、「北方領土は日本固有の領土です」という言葉がまず目に入った。読み進めると日本が過去にロシアと結んだ三つの条約の姿が浮かび上がった。それらは北方領土周辺の国境を法的に定めたもので、何度か国境が変わったり、両国の混住の地が存在したこともあった。しかし、北方四島は日本固有の領土であり続けている。つまり、北方四島が、日本固有の領土であることは、専門家でも大人でもない中学生の僕にもはっきりとわかることだ。

しかし終戦直後から、ロシアはこの四島をまるで自国の領土のように占拠している。このことを今そこに住むロシア人はどう思っているのだろうか、何を根拠に占拠を続けているのだろうか、さまざまな疑問が生まれた。

調べを続けると、まず島の経済環境の変化が見えてきた。僕は今まで、北方領土の生活は貧しいものだと、いうイメージを持っていた。しかしそれは二十年前のこと。当時は道路整備が不十分で、町並みも整っていない。なかつた。それがロシア政府が四島に約五百億円もの資本を投入したことに伴って多くが改善され、今ではロシア式の町並みが作られていく。さらには美しい自然環境を活かした観光地化まで進められていく。自己経済環境が変われば、そこに住む人々も変わる。以

前に行われた調査によると、色丹島のロシア人島民300人中、約60%の人々が「条件付きでなら日本に返還してもいい」という意見を持つていた。しかし、環境改善後は、大多数の島民が「返還反対」に意見を變えていく。またロシア政府も「北方領土問題について話を進めたい」という姿勢だったのが、プーチン大統領が二期目に入って経済力に自信をつけてからは、「今の状況は第二次世界大戦の結果である」と話し合いに消極的な姿勢に変わっている。僕は「過去の意見を変えている」という事実を知って、それは日本とロシアとの間で決めた法的な考えではなく、自分たちの利益のためだけに島を占拠しているのだと思つた。国として自国の利益を守るのは当たり前のことだが、領土問題は相手国があり、自国の都合だけで決められるものではない。

北方領土問題は、終戦後七十年近くたった今も、戦争の影響力の強さを物語り、その影を引きずっている。しかし時とともに戦争の記憶が失われていくのと同じで、元島民の方々が少なくなるにつれて、北方領土の記憶や人々の関心も薄れていくのではないかと心配している。

北方領土は日本固有の島。このことは歴史をたどるとはつきりわかることだ。アメリカも日本の立場を認められている。今ここで必要なことは「国民の関心を高め、ていくこと」である。そのためには学校の授業で「北方領土」という言葉を出すだけでなく、歴史や現状を踏まえた上で、生徒一人一人に自分の意見を持たせ、考えさせることが大切であると思ふ。そうすれば北方領土を解決するために政治家になりたい人や、海外に北方領土のことを知ってもらうために翻訳家になりたい人など多くの人材が現れると思ふ。

僕も北方領土についてもっと学び、考え、そして将来、日本国民全体で協力していきけるよう、今からさらに強く「関心を持つ」という火を灯し続けたい。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

北方領土返還運動について考えたこと

京都市立嵯峨中学校
一年 児玉 宜伸

北方領土は、歯舞群島、色丹島、国後島および択捉島の四島であり、ソ連（ロシア）によって法的な根拠もなく占領されています。現在まで、領土返還要求運動が続けられ、外交交渉が行われていますが、一進一退を繰り返している状況であるように思われます。北方領土返還に向け、今私たち一人ひとりは何をすべきでしょうか。

日本政府は、二月七日を「北方領土の日」と定めています。この日を中心に全国各地で大会やパネル展、署名活動など活発な国民運動が行われています。内閣府の資料によると、平成二十三年度には、九十五万四百二十三名の署名が集まり、総署名数は、平成二十四年三月末時点で八千三百九十一万名を超えています。このような精力的な取り組みを領土返還実現につなげるためには、国際世論に訴えるグローバルな視点が必要であると考えます。例えば、現在の北方領土には、島民としてロシア人が生活していることを忘れてはなりません。交渉の場では、同じ地球市民として、ロシア人の心情や生活保障にも配慮した具体案を提示することが大切です。もうすでに、日本政府はロシア政府に対して、そのような提案を行っているかもしれないかもしれません。ただ、ここで強調したいことは、国際社会が見守る中で、グローバルな視点をもった日本の立場と建設的な解決策を発信している姿勢を示すことの重要性で

す。歴史的に考えれば、北方領土が日本固有の領土であることは明らかです。しかし、その点をいくら強調しても、ロシアとの交渉が進展するように思えません。国際世論を味方につける意味でも、現在四島に住む人の人権にも配慮した政治的・経済的対策を検討する必要があります。言い換えると、歴史的事実に基づく「国対国」の交渉という構図から、グローバル社会の一員として「地球市民」の視点を重視した構図へと、転換することが大切です。そうすることで、「人対人」という人間尊重の立場からの交渉が期待できます。

また、北方領土問題の解決に向け、国内世論を高め、みんなが一丸となつて問題解決に向かい、日本全体としての国民感情の高まりが大切だとも思います。

北方領土返還交渉は、ラクビーの試合で強敵を相手にトライを決めるようなものだと思います。私は、幼い頃からラクビーをやってきましたが、その経験から、楯円のボールは決して規則的なバウンドをせず、ボールの動きは単純に予測ができません。一瞬一瞬の適切な状況判断が求められます。国際社会のグラウンドで日本がトライを目指すなら、国民が一丸となり、コミュニケーション力を十二分に発揮して強敵にタックルを試み、最後まであきらめず、交渉の努力を続ける姿勢が大切であると思いました。

最後に、私はこの作文を書くに当たって、いろいろなことを調べ考えましたが、その中で、一日も早い北方領土問題の解決を心より願うようになりました。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土問題

舞鶴市立城北中学校
三年 岡野 愛璃

みなさんは、現在北方領土に関してどんな問題があるか知っていますか。日本とロシアの間には戦後七十年近くたった今も平和条約が結ばれていません。この平和条約が結ばれていない状態は、両国にとってよい状態ではなく、北方領土問題の解決にも大きな影響があります。ここで、少し北方領土問題の原因となった出来事について考えたいと思います。

一九四一年、日本とソ連は日ソ中立条約を結んでいました。この条約は、有事の際はお互いが中立で侵略行為は行いませんよ、という内容です。しかしソ連は戦後すぐに条約を破棄し、北方領土に侵攻してきました。ソ連は、先に日本が条約を破棄したと主張しますが、日本にとっては不正に奪われたということを強く感じた出来事でした。その後一九五六年には、日ソ共同宣言が出され、歯舞群島と色丹島を平和条約の締結後に日本に返還すると決められました。平和条約が結ばれていない今、二島はまだ日本に返還されていません。

私は、もし平和条約が結ばれたとしたら、両国に大きなメリットがあると思います。まずロシア側から考えると、ロシアはGDPの向上を石油・ガスの輸出に頼っています。石油・ガスの値段が高値で取引されると、経済は右肩上がりになります。逆にリーマンショックや石油・ガスの値段が下がるようなことがあると、

経済は大打撃を受けます、だから日本の技術力や経済力を学び、それを使って石油・ガスだけに依存しないようにすることが必要だと思います。

日本にとってのメリットは、ロシアの資源が手に入りやすくなることと日本の安全が守られることです。天然ガスの埋蔵量が世界一であるロシアのガスを安値で購入することができれば、経済の向上に繋がります。このように、領土問題を解決し平和条約を結ぶということは、両国にとって経済や安全面でも大きなメリットがあるのです。

私は北方領土問題を絶対に解決しなければならぬと思います。私が考えた解決策は共同統治です。共同統治といっても、日ソ共同宣言で決められたとおり歯舞群島と色丹島は日本の領土とし、国後島と択捉島を共同統治するという考え方です。私は、北方領土は日本の領土だと思うので、この考え方が一番最適ではないかと考えます。

戦前には、北方領土に一万七二九一人の日本人が住んでいました。しかし現在はそこに日本人は一人も住んでおらず、漁業をするにも高額な入漁料の支払いが必要で、先祖の墓参りも自由にできない状況です。この状況を早急に解決することが日本が、しなければならぬことであり、また私たち一人一人も考えていくべき問題だと思います。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土のために

京都市立開晴小中学校
九年 安井 梨乃

「北方領土は日本のものである」という意見に私は賛成だ。幼い頃から何度か聞いたことのある北方領土問題。その時は「いつか解決するはず・・・」と他人事のように思っていた。それから今日まで、この北方領土問題が解決することはなかった。どこかで尽くしてくれている人々がいることはわかっているものの、それでも解決しないこの問題は相当手強いとわかる。では、私たちにできることはないのだろうか。

そもそも「北方領土」とはどのようなところなのか。まずはそこから調べていこう。

「北方領土」は四つの島よりできている。日本最大の島である択捉島をはじめ、小さな島々が連なっている歯舞群島や色丹島、国後島の四島である。そして、この北方領土の最大の魅力だと言っても過言ではないとても美しい「自然」がある。北方領土はその名の通り、北方にある島々のことだ。北方と聞くと、やはり寒いところだと思おう方も多いだろう。しかし、北方領土の気候は全く違う。北海道並み、またはそれ以上の寒さであると考えられる冬は、さほど寒くはなく、むしろ暖かいと言ってもよいほどだ。夏も比較的涼しく、過ごしやすい気候となっている。これだけ環境が良ければ自然と緑や花々も増してくる。新鮮な魚介類だっ

だが、残念なことに、今、日本国民に北方領土のことについて尋ねたとしても、必ずしも良い答えが返ってくるとは言い切れない。おそらく大多数の日本国民は、北方領土についてあまり良い印象をもっていないだろう。少なくとも私はその中の一人であった。この作文を書き始めるまでは。私はこの作文を書いていて、北方領土に対する想いや印象が一転した。書けば書くほど、様々な魅力に気づく。そして、もっと知りたいと思う。そんな衝動に駆られたからだ。

これらのことをすべて含めて考えると、何より「知ってもらおう」ことが大切だとわかった。たいていの人は噂を信じて疑わない。だからこの北方領土のことも、噂で聞いたことだけで判断しがちである。しかしそうではなく、きちんと自分で調べたもの、目で見たもの、耳で聞いたことなど、その全てと照らし合わせたときに、噂は嘘か本当かがわかるのだ。その答えが本当ならそれで良いが、時には嘘だということもある。だから皆さん、どうか知って下さい。北方領土について、自分の目で、耳で。

では私たちは何をしよう。国民に北方領土理解を訴えるポスター作成、魅力を伝えるビデオ作成、呼び掛け運動等々、考えてみれば山ほどある。私に出来るのだろうか。いや、出来なくてもやるんだ。北方領土のために。

今を生きている人間として

宮津市立養老中学校
三年 小嶋 雅

私は今、京都府に住んでいる。自国のことでもあり、今までも少しは北方領土問題に関心はあったが、今回、北方領土問題について考えてみて、知らないことがたくさんあったと改めて思った。そこで、これからの日本とロシアとの関わりに対する自分の考えをまとめてみた。

北方領土について、日本とロシアは今も対立を続けている。国民の中には「なぜ、両国とも北方領土を譲らないのだろうか？」と思う人もいるだろう。しかし、日本とロシアは北方領土を譲らないのではなく、譲れないのである。

「どちらかが譲歩すればいい。」
「実質的にロシアが支配しているので、日本が譲ってしまえばいいんじゃないか？」

「ロシアは土地の面積が広いから、北方領土ぐらい日本に譲ってもいいんじゃないか？」
という意見もあると聞く。

しかし、領土を守るといふことは、国を守ることでもある。そう簡単には解決しないのだ。

私は国家が対立するのは、ある意味仕方がないことだと考える。なぜなら、日本には日本の、ロシアにはロシアの立場があり、考え方も違うからである。考え方の違いがあるからこそ、今の対立が起こっている。しかし、現在では「青少年交流会」「北方四島交流事

業」などの活動が行われている。これは、ロシアや北方領土について自分の意見・考えを発表しあったり、実際に北方領土に住んでいるロシア人と交流したりする活動のことだ。ロシアと日本が北方領土について無理な話し合いをして、強引に「ロシアが実効支配しているからロシアのものだ！」元々は日本の領土なのでから日本のものだ！」となっても、国民はお互いの国に嫌悪感・不快感を抱くだけだ。日本人も外国人も人間なのだ。自分の考えを持つのはおかしいことではない。

しかし、今、この状況で大切なのは、ロシア人との交流などの活動でお互いの国に対する嫌悪感や不快感を少しずつ減らしていくということだと思う。そのことで少しは対立も減り、日本もロシアもこの問題の解決に向けて前向きな話し合いができるのではないだろうか。

私たちには、母国に住んでいる人間として考えなければならぬこと、やらなければならないことがあると思う。北方領土について一人一人が意識し、偏見などにとらわれず、解決に向けて皆で協力していくことが大切なのではないだろうか。時が経つにつれ、日本とロシアの間にはたくさん問題が生まれてくると思う。その時こそ、皆で協力し合っていくことが必要となる。私は、日本という国に住んでいる人間として、今を生きている人間として、さまざまな人たちと自分の意見を交換したい。そうすることが北方領土問題解決への第一歩ではないだろうか。

優秀賞（京都新聞賞）

戦争の火種か平和への一歩か

京都市立東山泉小中学校

九年 岡田 真彰

今から約七十年前、第二次世界大戦が終結し、世界は平和に向かつて進み出した時代、日本も徐々に世界の信用を取り戻し一九五一年にはアメリカやイギリス等、四十八カ国との間にサンフランシスコ平和条約を結び、平和に向かつて一歩を踏み出しました。

それでも、まだ国と国とのもめ事は日本にも残っています。その内の一つが我々もよく耳にする領土問題です。

中でもロシアと交渉中の北方領土問題はそれらの代表と言えるでしょう。一九五一年に締結したサンフランシスコ平和条約では、千島列島と南樺太の権利・権原及び請求権を日本は放棄しましたが、千島列島に択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の北方領土は含むのか、含まないのかで現在、ロシアと交渉中でこの問題を解決すればロシアとの平和条約を締結することになつていますが、それまではこの二つの国の間で言葉や武器にした小規模な争いが繰り返らているのです。日本は、この七十年間は戦争がなく、平和な国ですが、ロシアとまだもめていることもまたまぎれもない事実です。

日本がまだ戦争ばかりしていた時代、各国への侵略行為、ロシアとの日露戦争など、たくさんのおし事をはたらいていた日本も、第二次世界大戦後に北方領土を侵略されました。それ以来、幸いなことにそんなこと

は日本では起こっていないのですが、また侵略行為を受けたり、したりするかもしれません。僕はこの領土問題が第三次世界大戦の引き金になつてしまうのではないかと思えてなりません。そんな最悪の事態を迎えないためには、どうすればいいのでしょうか。

そんな思いでパンフレットを見ていました。そこで見つけた「北方四島交流事業」の項目、一九九一年にソ連側から提案されたこの事業は、とても画期的な事業だと思いました。この状況の中で最も大切なものは、お互いの事を傷つけずに理解し合うことだと思えます。そう考えればこの事業の重要性が僕には良く分かりました。

日本とロシアの両国が理解し合えば、きっと平和的に領土問題を解決して、平和条約を締結させる日が近い将来にやってくる、そして、それを成功させるのは、今たくさん学んで、成長している私達であるということです。これを忘れてはいけないと、僕は強く思いました。

この領土問題を新たな戦争の火種にするのか、平和への一歩にするのかは私達にかかっているのです。

思いやりの心を持って考える北方領土問題

南丹市立殿田中学校
二年 井尻 葉月

私はこれまで、北方領土には日本人が住んでいると
思っていました。イメージで言うところの沖繩のような感じ
です。元々日本の領土で、そこには日本人が住んでい
たにもかかわらず、ロシア人が勝手に住みだしている
状態だと思っていました。しかし、北方領土について
ある本を読んだ時、北方領土にはロシア人ばかりが住
んでいて、日本人は追い出されたということを知りま
した。それだけでなく、今は北方領土に行くことさえ、
外国に行くよりも難しいのだそうです。

太平洋戦争終結後、ソ連が北方領土を占領し、北方
領土返還要求運動が始まって以来、もうすでに半世紀
以上たっています。あまり返還に向かつて話が進ん
でいるように思えません。私の家でも、時々食事の時
に尖閣諸島や北方領土などの領土問題の話題が持ち上
がってきます。その時に「なぜ、占領されんの？」とか
「〇〇国はするい。」とか「〇〇国の方が領土が広いの
に。」など「取り返したい」という思いはたくさん出て
くるのですが、「そのためにどうするか。」ということ
は出てこないのです。そして結局は「難しい問題だ。」
というところで会話は途切れるのです。

確かに難しいのです。どちらの国にとってもうまく
いく方法など滅多にないことだと思います。でもそこ
を考えて、話し合ってみんなが解決しようと思いで思
わないから、問題を今日まで引きずって来たのだと思

います。

北方領土が得られるとよいことがたくさんあります。
漁場は世界三大漁場の一つに数えられ、いろいろな魚
や貝、海藻が豊富に採れます。また、寒冷地なので質
のよい木材が育つし、地下資源も豊富で金や銀などの
鉱産物が出ていたそうです。これほどの宝島が手に入
れば、経済的によくなることは目に見えています。「だ
からロシアは北方領土がほしいのか」と思いました。
そしてロシアはそれを自分たちのものだと思ってい
るのです。

日本ももっと北方領土について主張すれば、ロシア
の人たちに気持ちを伝えられると思います。けれどそ
の主張の仕方、ただ単に「北方領土を返せ！」ではダ
メです。そのような一方的な考えでは、すぐに戦争に
なってしまうと思います。相手のことも考えなければなり
ません。

でも、もし北方領土が日本に帰ってきた場合、そこ
に住んでいたロシアの人々はどうなるのが心配です。
ロシアに帰って、北方領土に住んでいたことで差別を
受けられないだろうかとか、追い出された日本の元島民の
ように、もしかしたら北方領土を故郷だと思っている
ロシア人もいるかもしれないから、その人の気持ちな
ども考えていく必要があります。

このようなことや、もっと他にもあるいろいろな問
題を少しずつでもいいからみんな考え、解決してい
けば、小さな解決がどんどん積み重なり、やがて「北方
領土問題」という大きな問題は解決すると思います。

優秀賞（KBS京都賞）

北方領土解決への道

京都市立中京中学校
二年 原田 美玖

北方領土は日本固有の領土である。第二次世界大戦で日本は敗れて、対戦相手ではなかった現在のロシアに北方四島を占領されてしまった。当時のソ連はとても強く、戦争に敗れたことも含め、口ごたえをするところがあまり出来なかった。

その後、少しの年月が経ち、ようやく北方四島を返してほしいと言いだした。話し合いをするも、上手く避けられ、約七十年の間、返してもらおうことが出来ていない。

私はこの北方領土問題について三つ思うことがある。一つ目は、故郷と七十年間の年月である。北方領土問題は約七十年間が経とうとしている。現在、北方四島には日本人は住んでいない。誰が住んでいるのかというと、ロシアの人々だ。七十年も経てば、北方四島に住んでいる人々からするとそこが故郷になっていく人も少なくないだろう。それを「すぐに退いてください」と言われても、「退きます」と答えることは出来ないと思う。実際、私がそう言われても退くことが出来ない。それは生まれ育った町が好きだからだ。ロシアの人々も同じような思いがあると思う。このようなことも大きく関わると思う。

二つ目は政治とメディアである。日本人の性格では、はっきり相手にものを言わず、良いかっこうばかりしてしまう。それはもちろんダメなことではない。それをするからこそ、仮に日本が大きな被害にあった時、

世界中の人々から助けをもらうことが出来る。その一方でこの領土問題は、話し合いをし、お金がないからと言われたらお金を出し、そしてうまく避けられていくという繰り返しになっている。それを繰り返してもうまく利用されているだけで、解決への道は何も進まないと思う。また、数年に一度、首相は代わる。話し合いをするたびに人が代わっていたら意見も変わってくる。

さらにメディアはロシアと話し合いをする時は、テレビや新聞などで大きなニュースとして取り上げているが、少し経てばそれっきりになっている。そういうことも大きく関わると思う。

三つ目は教育である。北方領土に関わらず、その他の領土に関わる問題などはくわしく教えられていないのだ。私も、北方領土はロシアに占領されていること、その島は択捉島、色丹島、国後島、歯舞群島ということとくわしいし知らなかった。このように日本の問題をくわしく教えられてないため、一部の人が関心を持っていないのである。もつと教育をされて、一人一人がもつと日本への愛国心を持つべきだと思う。

これらを通して、七十年の間に本当に解決出来なかったのかと思う。これから国民全体への教育、日本への愛国心、そしてこれから生まれてくる政治の力、ロシアに対して、それらの力がどれだけ強いかが解決への鍵になるのではないだろうか。

返還を待つ北方領土

京都市立醍醐中学校
三年 藤原 裕吾

私達、中学生の中でどのくらいの人が北方領土問題についてしっかりと説明できるであろうか。第二次世界大戦後、日本領土である齒舞群島、色丹島、国後島、択捉島の島々をソビエト連邦が占領し、その後もソビエト連邦を引き継いだロシア連邦が不法に占領している。日本政府は、これらの島を返すように求めて、交渉を続けているくらいしか知らない。

私も小学校五年生の社会科の授業で少し習っただけなので、何が問題なのかよくわかっていないのが実情だ。私が生まれる前、両親も生まれる前、七十年前のことだからピンとこないのも当たり前じゃないかと感じる。

この作文を書くにあたって、私はインターネットで北方領土がどのようなものか調べ、問題は何かをを考えてみた。

一つ目は、領土問題は関係両国どちらにも言い分があり、その主張が片方が百パーセント正しいことはありえない点だ。私は、歴史的事実、国際法などからみて北方領土は日本の領土であると思う。昔から日本人が住み、豊かな自然の中で漁業などをして暮らしていたのだ。太平洋戦争がなければ今も姿が見られただろう。でも、ロシア側はどういう考えなのだろうか。反対の立場からの意見を知りたくなかった。

二つ目の問題は、もし返還されることになる、現

在北方領土に住んでいる人はどうなるのであろうか。豊かな自然に囲まれて長年住み慣れた土地を離れなければならないのだ。私とその立場になったら途方に暮れるだろう。「住むところは？」「学校は？」「仕事は？」と問題は山積みだ。

でも、何故、ロシアは広い国土があるのに、こんな小さな島に固執するのだろうか。やはり海流と北海道本島と隣接諸島との間に大陸棚を形成しているため、豊富な水産資源に恵まれている点や二百海里経済水域問題、地下資源などだろうか。疑問がわくばかりだ。今回、北方領土のことを勉強してみてもっと学校でも教えてもらいたい。ニュースなどでも北方領土返還問題のことは取り上げられているが、北方領土返還問題イコール進展無しがずっと続いている。政府も打開策を考えてくれていたのだろうか、国民がもっと関心をもつべきだと思う。これから社会を支えていく私たちに、もっと問うべきことだと思う。

現在、北方領土の他に、竹島、尖閣諸島と日本にとっての領土問題はたくさんある。双方が自国の領有権を一方的に主張し、どんどんつつ走っていくと、両国の関係に深い溝ができてしまう。そこから外交が悪化し、取り返しのつかないようになることはあってはならない。そう考えると領土問題はデリケートな問題だ。

町の鮭が

京都市立東山泉小中学校
九年 佐藤 光

「いただきます。」昨日の晩ご飯は、家族が大好きな寿司だった。一番最初に手に取り、口の運んだのは、チャイニーズレッドに輝くサーモンだった。サーモンといえば、何といても油がよくのったプリップリの身がふわふわのシャリを包みこみ、寿司の代名詞にもなりかねない。これがサーモンだ。でも僕は思った。このサーモンが現実では、いつでもどこでも食べることができている。みんな「もしも地球が最後の日だったらどうする。」など言っているが、そのサーモンのもしもを考えた時、なくなるか、なくならないかの決め手は、僕たちの領土である。

僕たちが生きていく資源を手に入れるためには二つの手段がある。一つは他国からの輸入だ。そして二つ目は、自国の二百海里水域内で手に入れる方法だ。これがまた困難であり、小さな一つの島さえあれば、全てそのまわりの二百海里は、島をもつ国のものとなる。サーモンは鮭。おもに北海道で取れる。それでは、簡単に取れるではないかと思うかもしれない。しかし、行く手をはばむのは、ロシアとの北方領土である。日本もロシアも北方領土は生きていくうえで、大切な存在となっている。

北方領土問題の歴史は長い。数々の条約で日本の少し北の地域は、いろいろな国のものへと移りかわっていった。しかし、歴史上、北方領土は日本のものへと

なっていた。そして、また戦いがやってきたのだ。日本が負けると当時のソ連が北方領土へとおしよせて来た。「シーベルナフチリドリービーシェルスキー。」ロシア語で（北方領土はロシアのもの）こうやってロシアの人々は、おしよせてきたのだろう。

それに対して今の日本は、「北方領土は日本のもの。」対立する両者は、一歩もゆずらない。僕は思った。双方の国どうし、けんかになっってしまうぐらいならば、どちらのものとは決めずに分けるのはどうかと。そんなことを思った僕は間違っていた。北方領土でけんかをしていてるのは、何より国民のことを思ってくれていたのだ。おいしい鮭をみんなに届けようがんばってくれていたのだ。なのになぜ僕は気付かなかった。なぜみんなは気付いてくれないのか。食ることがあたりまえになっっているからだろう。

僕を生かしてくれている食べ物。それと同時に、人間により失われる命。これがなければ生きてはいけない。だからこそ、もっともつと日本は歴史を訴えていくべきだ。武力になんかに負けてはいけない。その日本人の熱いハートを、今こそ世界に見せつけるのだ。

佳作

世界へ発信、北方領土

京都市立嵯峨中学校
三年 小林 尚子

終戦後の九月五日、ソ連(ロシア)に不法占拠された北方領土。六十九年たった今でも返還されておらず、今も返還を心から願う人々はたくさんいる。日本は、長い間返還を求めているが、ロシアも自国の領土であると主張している。一方で、日本以外の国では北方領土問題に関心は薄く、メディアでもあまり取り上げられていない。

一例として、領土を色分けしている世界地図がある。海外製のものは、たいてい北方領土をロシアの領土として塗られている。多くの国では「北方領土はロシアの領土だ」と捉えていることがここからも分かる。さらに、「千島樺太交換条約」が締結されているという歴史的事実があつたにも関わらず、国連等の国際機関が北方領土問題には介入してはこない。このように、日本のみが「北方領土は返還されるべきだ」と主張しているように感じられる。このことから、日本人の立場で北方領土問題と向き合うだけでなく、視野を広げ、国際的・客観的な視野で行動する必要があるのではないかと考えている。現状では、北方領土に対して無関心な海外の人々に、「日本へ北方領土の返還を」というメッセージを発信しても、なかなか理解や同意を得ることは難しい。

では、具体的にどうしていけばいいのだろうか。世界の人々と文化的交流により、北方領土問題に対する「正

しい歴史」を知ってもらい、重要な国際問題と認識され、関心が高まっていくことが、解決への足掛かりになると言えるのではないだろうか。例えば、今年公開された「ジヨバンニの島」は、ソ連侵攻前後に北方領土で生活していた人々をモデルとした長編アニメーションである。終戦直後のソ連侵攻を日本人側の視点で描かれてはいるが、世界各地の映画祭でも評価され、ファンタジア国際映画祭では最優秀賞を受賞している。中でも、モスクワ映画祭では、正式な招待作品として上映され、モスクワ市民から高い評価を得、「教科書では知らなかったことを知ることができた」というコメントさえもあつた。これは、「正しい歴史」を認めてもらった一例である。

そこで、私は提案したい。これまで日本が領土返還を求めてきた経緯を世界により一層工夫して発信し、「正しい歴史」を世界中で理解されるように努力していこう。これには、国民の強い意思が必要となるだろう。

中学生の私が今すぐできる行動は、今回調べたことを深く掘り下げることだろう。例えば、世界の地図をインターネットだけでなく、実際に手に取ってみるために、図書館を利用するようなこと等で、他国の北方領土への認識を確認していく。また、交流面では、外国の人が北方領土について、どのような知識をもっていて、どのように考えているかを聞いていく。そのような活動の中で、自分の考えたことや主張を言語化して、様々な場面で発信していくことは重要だと考えるので、積極的に取り組んでいきたい。

歴史を知るということ

京都市立西京高等学校附属中学校

二年 佐藤 彬子

日本は今、北方領土問題を抱えています。この作文を書くまで、私が北方領土問題に関して知っていたことは、北方領土が第二次世界大戦後からロシアに不法占領されており、また、現在はロシア人の人々が北方四島に住んでいるということだけででした。しかし、ロシアに不法占領されているといっても、具体的にどのようなロシアが占領しているかや、島にいた日本人の人々はどうなったのかということまでは知りませんでした。今回、作文を書くにあたって自分で北方領土問題について調べ、自分が今までいかに無知であったかに気が付きました。そして、今、私が強く思うことは「私たちは歴史を知る必要がある」ということです。一九四五年、北方四島がロシアに占領されました。それまで北方四島には一万七千人以上の日本人が住んでいました。北方四島に住んでいた人々にとって、北方四島はふるさとです。先祖代々受け継いできた土地には、きつと長い歴史があり、北方四島の人々はその歴史を誇りにされていたと思います。それらが占領によつて突然奪われた時、北方四島の人々はどのように思われたのでしょうか。悲しみ、怒り、驚き、諦め、……私には想像もつきません。このような人々の思いや人々の誇りである島の歴史を、私たちはきちんと理解する必要があります。またそれらを理解するだけでなく、重んじることも大切だと思います。

しかし、現在北方四島に住んでいるロシアの人々にとつても、北方四島はふるさとです。そしてまた、ロシアの人々にも歴史があります。私たちがロシアから北方四島を返還してもらおうことによつて、ロシアの人々の誇りや歴史を奪うようなことになってしまつてはいけません。日本の北方四島の人々が経験した思いをもう一度ロシアの人々に経験させてしまつては、平和な北方四島の返還とは言えません。だから平和な北方四島の返還のためには、歴史を知ることが一番大切だと思います。

「領土問題」と聞くと、国と国との難しい問題のように思えます。私もこの作文を書くまでは、そのように思っていました。「私のような一人の国民が、何を言つたつて意味はない。」と。しかし、この作文を書くにあたって、たくさんの方のことを学び、考えが変わりました。大切なのは国民一人一人が歴史を知ることです。いつでも問題が起き、誰がどのような思いをしたのか、このようなところまで国民一人一人が考えられたら素晴らしいと思います。北方領土問題は遠い国で起きていることではありません。自分の国で起きていることとして私たちが責任、自覚をもち、北方領土問題について一人一人が理解を深められたら、問題は解決されていくと思います。

北方領土をまずは知ろう

京都市立西京高等学校附属中学校

二年 田中 黎奈

私はこの作文を書くにはまず、北方領土について知らなければならぬと思った。なので北方領土について調べてみることにした。調べてみた結果、日本はロシアより早く北方領土の存在を知り、一八五九年の日魯通好条約（下田条約）で北方領土は日本の領土だということが確認されていた。では、なぜ今北方領土問題があるのだろうか。それは、第二次世界大戦の末期、日本がポツダム宣言を受諾し、降伏の意図を明確に表明した後、ソ連軍が北方領土に侵攻し、さらに日本人島民を強制的に追い出したからだそうだ。そして、ソ連からロシアになった今も、北方領土を不法に占拠し続けているので、まだ問題は解決していない。千島の領土権は破棄しているみたいだ。現在、北方領土にロシア人も住んでいることを私は初めて知った。

では具体的にどのような解決策を出せば良いのだろうか。この問題は正直、どっちかが悪いとかそういうのではないと私は思う。なぜなら、日本には日本の主張があり、ロシアにはロシアの主張があるからだ。それにこの問題は、戦後から何十年もの時間があつながら、未だに解決していない。このような状態であるということ、日本がやり方を見直す必要が少しあるのではないかと思う。それに、一時期ロシアから、歯舞群島と色丹島の二島が返還されるといふ話があったらしい。だが、日本政府は四島全ての返還を求めた

そうだ。これは、日本が北方領土は自分たちの領土だと思っただけから、こういう対応をしたのではないだろうか。現在も政府はいろいろな解決策を出してくれているでしょう。そして署名の人数も増えて、たくさん集まっているみたいだ。

このように私は、解決策を少し考えてみたが、実際に自分ができるとは思わなかった。そこで私の住んでいる京都は、どのような活動をしているのかなと思つたので調べてみることにした。調べていて気づいたことが一つある。それは京都と北方領土にはつながりがあったということだ。幕末の頃、京都御所に、新しい時代のことを話し合っていた若い卿の一人が東久世通禧（ひがしくぜみちとみ）という人がいた。その人は明治維新の後、北海道開拓使長官として北海道開拓の基礎をつくり、北方領土の安全に力を尽くした。つまり、京都の一人が北方領土の開拓に協力したというつながりがあったのだ。また、京都が北方領土のために行った活動が一つあった。一九八二（昭和五七）年九月三日、京都商工会議所講堂において、それまで別々に北方領土返還要求運動に取り組んでいた一三の団体が一つにまとまって運動を展開する必要を話し合い、府民会議を結成したのだ。

このように、北方領土問題に関わっているのは政府だけでなく、日本全国である。まずは今の現状を知ることが大切だと思う。そしてこれからどうなっていくのかすごく楽しみで期待しようと思った。

北方領土について

与謝野町宮津市中学校組合立橋立中学校

二年 西谷 香紀

北方領土問題とは、第二次世界大戦末期、日本がポツダム宣言を受け入れた後に、ソ連軍が北方領土を不法に占領し、日本人の島民を強制的に追い出して北方領土を占拠し続けている問題のことです。この問題は七十年近く日本とロシアの間に立ちはだかつています。そもそもなぜ、日本もロシアも北方領土に強くこだわるのでしょうか。その理由は大きく分けて二つあると思います。

一つ目は、自分たちの自由にできる土地や海が増えるからです。北方領土はとても価値のある自然豊かな島々で、たくさん動物や珍しい鳥などが生息しています。また、北方領土周辺の海では寒流と暖流が交わっており、世界三大漁場の一つとなっています。これは、漁業面等で大きな利益となるでしょう。

二つ目は、日本側からすれば、北方領土に住んでおられた方々の故郷、笑顔が返ってくるから。ロシア側からすれば、今、北方領土に住んでおられるロシア住民の生活を奪わなくてすむからです。故郷に帰ることがかなわず、悲しい思いをされている方々が願いを叶え、笑顔になれば、それほど嬉しいことはありません。しかし北方領土に住んでおられた方たちの故郷を奪ってはいけなかったのと同じように、今住んでおられるロシア住民の生活を奪ってはいけません。

この問題をいい方向に向かわせようと、現在「北方

領土返還要求運動」や「ビザなし交流」等が行われています。また、「北方領土の日」や「北方領土返還運動全国強調月間」もあります。

今回、この作文を機に北方領土について調べてみて、とてもたくさんの人たちが北方領土返還を願い、努力していることがわかりました。私の住む京都府でも協力しながら署名運動等の活動が行われ続けています。このように、たくさんの人々が、北方領土返還を願っているにもかかわらず、未だにこの問題は解決できずにいます。これはとても難しい問題だと思います。私もどれが最善の答えとなるかわかりません。しかし、一人でも多くの人が北方領土問題について深く知り、真剣に考え、行動を起こしていけば、いつかきつとよい答えが見つかるはずだと思います。その日まであきらめずに、活動や交流を続けていくこと、それが大切だと思います。

佳作

北方領土問題と僕

福知山市立日新中学校

二年 土井 皓介

ロシアとの領土問題。そのことを知ったのは数年前のことだ。

当時小学生だった僕は、社会科の授業でその存在を知った。その授業が終わり、振り返りの時間で「北方領土問題についてどのように思ったか？」書くことになった。小学生の僕は

「ロシアは大きな国だから、そんな小さな土地ぐらい返してくれたらいいのに。」と書いた。

時は進み現在。なぜロシアが北方領土を返してくれないのか、が少しずつわかってきた。北方領土周辺の海では、魚介類がたくさん採れる。北方領土が自国のものならば周辺の海も自国のものになる。このようなプラスになることがあれば、自国のものにしたと思うのも当然であろう。

しかし、北方領土は日本のものである。一八五五年、日露通交条約で択捉島と得撫島の間で国境が定められた。そして第二次世界大戦終了後、ソ連軍が占拠した。この行いはポツダム宣言に違反している。つまり、北方領土はロシアが不法に占拠しているものであり、正しくは日本のものである。

しかし、この事実他国ではあまり知られていない。外国の地図を見てみると、ロシアの地図は北方領土を自国のものとしている。さらにアメリカ、イギリスの地図も北方領土をロシアのものだと書いてある。

つまりロシアが不法に占拠したという事実が外国に認められていないのだ。

僕は思う。北方領土問題の解決にはロシアだけでなく、他の国への説明が必要だと。他の国に説明することにより、いろいろな国が「北方領土は日本のもの」と思うだろう。「不法に占拠したロシア」というように思えば、ロシアのものになっっているのがおかしいという事実を知ってもらえる。そうなれば日本に戻るのも夢でなくなるかもしれない。いつか北方領土が日本に戻ると信じて解決に向けて進んでいってほしい。

北方領土の今に思う

京丹波町立蒲生野中学校

三年 由良 涼人

傍観者は加害者だ。学校でいじめの問題を学習したときに言われたことだ。「ただ見ていただけ」というのも罪になるといふことだと思ふ。そしてそれは、社会の中でも当てはまるのではないだろうか。

僕が北方領土問題を学習したときに、「聞いたことがあるけど、よくわからない。それに自分には関係がない。」と思つていた。しかし、北方領土に住んでいた人たちが、突然やってきたロシア人に銃を突きつけられ、自分が住んでいた場所を、家を奪われた。それを考えると、家を奪われた人々のために「ロシア人と同じ事をしてしまえばいいのに！」と思つた。

しかし、強制送還が行われたのは、今から約六十六年前のことである。その六十六年の間には、国は違つても北方領土で子供が生まれ、その子どもたちも大きく育つてゐる。今、北方領土を取り返すために武力を用いても、日本人がされたことと同じようにロシア人が悲しみ、武力に訴える可能性だつてある。そんなことをすれば戦争になりかねない。それにまず第一に日本には憲法第九条で武力の行使は認められていない。

ではどうやって北方領土を取り返せばいいのだろうか。僕は共生していくことが一番いいと思ふ。無理に奪い取るのではなく、お互いに関心を高め合い、理解し合うことが大切だ。そうすることで戦争を防ぐことができる。それだけでなく、ロシアとの友好関係を深める

ことがいいと思ふ。

現在では、北方四島在住のロシア人との相互関係を促進するために北方四島交流事業が行われている。この活動を通してお互いを知り合うことが大切だと思ふ。北方領土の学習を通して、お互いを避けるのではなく、相手を知り、自分を知つてもらうことが大切なのだと思つた。僕らの世代は戦争を経験せず育つてきた。そのため戦争のことに關して軽く捉えがちであると思ふ。しかし戦争を体験した人たちが何をし、何をされたかを知り、その解決策を今考えていかなければならないと思ふ。「ただ見ているだけ」は罪になるのだ。

僕は今、この北方領土問題について考える機会があつたことに感謝したい。そして北方領土問題についてもっと考え、他の人に伝え、関心を広げていくことをしたいと思ふ。

北方領土問題

宮津市立宮津中学校
三年 野谷 礎生

つい最近、新聞やマスコミが取り上げていた話題に、中国の南シナ海支配のニュースがあります。フィリピオンやベトナムとの国境近くに、突然ブロックを築いたり兵隊を送り込んだり、大国主義の正義を掲げて領土を増やしています。その前にも日本との間で尖閣諸島でのぶつかり合いがありました。中国は、一方的に武力行使も辞さないとして、いかにも背中に銃を突きつけているかのように脅してきました。しかも、その近くの大陸棚に相当の量の石油が眠っていると報じられた頃から。

ロシアも同じようなことを起こしています。ウクライナ・クリミア半島への侵攻です。ウクライナ国の住民の中にロシア系の人たちが多いからといって、突然の侵攻は国際法上も許されません。その地はロシア系の人々もいれば、ウクライナ系の人々も生活し暮らしている独立国家です。武力を背景に突然踏み込むのは、まるで終戦直後に択捉島や国後島などで起こった出来事と全く同じものです。

「突然、ソ連軍が侵攻してきて択捉島を占領し、土足のまま家に上がり、銃を手に腕時計や万年筆を略奪しました。民間のソ連人も来て日本人の家を仕切り、そこで生活を始めました。そしてその後、強制送還され収容所へ入れられなくなった人もありました。」
今ではどうして考えられないような出来事が起こっ

ていたのです。一九四五年の出来事。今からおよそ七十年前の出来事です。ところが、今クリミア半島で同じようなことが起こっているかもしれません。何を正義によその国の国土へ入り込めるのでしょうか。

私たち庶民は、戦争や紛争は決して望んでいません。もめる必要は全くないのです。きっと、今現在北方領土で生活をされているロシア人の人たちも、私たちと同じように普通に毎日を送っておられると思います。スポーツをし、新聞や雑誌を読んだりするのはないでしょうか。

社会体制が違っていても、毎日の暮らしや家族を大切にすること、友達と笑いあうこと、近所の友達と助け合うことなどは同じではないでしょうか。庶民の私たちはいがみ合うことはないのです。ですから、北方領土との交流事業が始まったことはすごくいいことだと思います。おじいさんやおばあさんなど、以前その地で暮らしておられた方がおられるでしょうし、その方たちが気軽に島を行き来できるようになり、日本人もロシア人も同じ立場で歩いているのが普通になり、互いに声が掛け合えるような、そんな島になってほしいです。

残念なことにあれから七十年が過ぎてしまいました。あと何年、何十年後かにも互いが歩み寄れたらと思います。まず、普通の人々の交流が平和と解決への一歩となると思います。

北方領土問題について

亀岡市立南桑中学校
三年 石原 美季

私は中学二年生の時に北方領土について学び、その豊かな自然や文化、日本が今も抱えている問題のことなどを知りました。そして自分の故郷を失った方たちのことを考えると胸が痛んだことを覚えています。三年生になった今も、その気持ちは変わりません。

では、なぜロシアが北方領土を返してくれないのか、私は疑問に思いました。インターネットで調べてみると、天然資源が見つかったため、北方領土海域を通らないと太平洋に出られないため、等いろいろ理由が挙げられていました。北方領土を所有している方が得になるのは、一目瞭然だということが、政治に疎い私にも理解できました。

調べて行くにつれて、中には、「日本は一度国際条約で放棄した土地を、いつまでも日本の領土だと主張している。北方領土にこだわっているのは日本だ。」等と言う意見もありました。確かに日本は、千島樺太交換条約を締結して、日本が樺太をロシアから譲り受ける代わりに千島列島を放棄しましたが、その中には北方領土は含まれておらず、その意見は少し的外れな意見だと思いました。でも人々の中には、そんな意見を持っている人がいて、ただただ日本が一方的に返還を迫るような考え方や、日本だけが被害に遭っているなんていう考え方も間違っているような気がしました。どちらかの意見が当たっているなんて思いませんが、私

たち日本人ももっとこの問題の事を知って、先ほどのようなちよつとした勘違いをなくしたり、相手の国の目線になって考えることも必要になってくるのではないかと思います。

最初に書いていたとおり、元島民の方々が自分の家に土足で入られて追い出されたり、不衛生な環境の中、何日も船内での生活を強いられ、満足な食事も与えられず、命を落としてしまった幼い子どもたちや人々。つらい思いや苦しい思い、悔しい思い、やるせない気持ちもたくさんあったと思います。私なら耐えられないです。それでも耐えて耐え抜いて今でもそんな気持ちを抱えたまま、故郷に帰ることすらできない人たちがいらつしやることを考えると、私も胸が痛み、何もできない自分が不甲斐なく思えてなりません。

だからこそ、何もしないのではなくて、今よりもっと深いところまで北方領土のことを学んで知っておくことが何より大切だと思います。

それだけでは何も変わらないけれど、何もしないよりずっと価値があることで、学ぶことをきっかけに返還のために何かできるかもしれないと私は考えます。ほんの些細なことでもいいのだから、私はこれからも北方領土問題に触れていこうと思います。